〔個人研究〕

『維摩経』における不二法門について

西　野　　翠

はじめに

『維摩経』(the *Vimalakīrtinirdeśa*「ヴィマラキールティの説示」)とは、「空思想、空平等等性によって不二を基盤とし、真の菩薩行を説く経典」[1]であり、その明かすところは「蒙惑を救うには慈悲を以て首となし、宗極を語れば不二を以て門とする」[2]といえる。換言すれば、『維摩経』は「不二」と「真の菩薩行／慈悲」を両輪とする経典である。

『維摩経』においては随処で不二が説かれているが、特に第８章は「不二法門に入る章」(Advayadharmamukhapraveśaparivarta)と名づけられ、維摩が投げかけた質問に答える形で、文殊を含む三十二人の菩薩たちがそれぞれの「不二観」を披瀝している。そして、その章の棹尾を飾るのが「維摩の沈黙」である。

『維摩経』を貫く不二思想は『阿含経』以来[3]、仏教諸経典にみられ、大乗仏教の中心的主題となっているが、その淵源はウパニシャッド哲学の本領たる「梵我一如」にまで遡り、さらにはヴェーダーンタ哲学のシャンカラが主張した不二一元(advaita)論にも通じる。しかし本稿では、不二思想の歴史的変遷等には触れず、『維摩経』の「不二法門に入る章」(入不二法門品)における「維摩の発問 → 諸菩薩の回答 → 文殊の総括的見解 → 維摩の沈黙と文殊の称賛 → 五千の菩薩の入不二法門」という流れに沿って論じた。

1 「入不二法門」を巡る語義解釈

1-1　章題の解釈：梵蔵漢対照

「不二」を主題とする第８章は従来、羅什訳の品名を採用し「入不二法門品」あるいは略称で「不二品」と呼ばれてきた。ここで改めてサンスクリッ

ト文、チベット訳、および三漢訳（支謙、羅什、玄奘）の章題を比較対照し、各訳者の解釈の違いを確認したい。

サンスクリット文は『梵文維摩経 ―ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂―』（大正大学綜合佛教研究所梵語仏典研究会；以下「校訂本」）を、チベット訳および三漢訳は『梵蔵漢対照「維摩経」』（同；以下「対照本」）を用いた。

梵文：Advayadharmamukhapraveśa（不二の法門に入る）
蔵訳：Gnyis su med pa'i chos kyi sgor 'jug pa（不二の法の門に入る）[4]
支謙訳：不二入法門（不二入の法門）
羅什訳：入不二法門（不二法門に入る）
玄奘訳：悟入不二法門（不二法門に悟入する）

サンスクリットの章題は advaya-（不二）、dharma-（法）、mukha-（入り口、門、ドア）、praveśa-（入ること）の四語から成る。チベット訳も同じ四語から成るが、各語をつなぐ助詞によって直訳すると「不二の法の門に入る」となり、羅什訳および玄奘訳は「（入／悟入）不二法門」とある。「不二法門」を「不二法の門」と読むか「不二の法門」と読むかについては、論理学的見地から仏教経典の研究を進めた児山敬一が次のようにいっている。

> 「不二法門」（Advaya Dharmaparyāya）は、いうまでもなく、不二という法門であって、不二法の門ではない。そして、「法門」とは、方法（Methodus）であり、推論の作用を媒介するものとして、その作用のために、あらかじめ設けられる理念的なもの（Idee als Hypothese）である[5]。

『岩波仏教辞典』（岩波書店、1991年）では dharma-mukha と dharma-paryāya を同義語とし、前者は「仏の教えに向かうこと」、後者は「教えの説き方、さらには仏の教説・教えの意」としている。É. Lamotte は chos kyi sgo（法の扉／入り口）を「教義、教え」と訳している。モニエル梵英辞典で mukha を引くと‘the mouth, face；introduction, commencement, beginning’と並んで‘the original cause or source of the action’があ

り、その説明として‘Certain teachings are called ”Dharma-doors,” as they provide access to the practice of the Dharma.’（ある教えは法の実践への道をもたらすので「法門」とよばれる）という一文を挙げている。

「入る」に当たるサンスクリット praveśa は動詞 pra-√viś から作られた名詞であり、pra-√viś には‘to enter, go into; to reach, attain ; to enter upon, undertake, commence, begin, devote one’s self to ; to enter into i.e. be absorbed’などの意味があり、チベット語の ’jug pa も同様に‘to go, to walk in, to enter; to set, fall to; to begin’などの意味がある。「入不二法門」というときの「入」は、単に「不二法門」に入門して学んで悟るという観念的側面ではなく、実際に門をくぐり自らの足で進んで行くという実践的側面が重視されている。‘to enter into i.e. be absorbed’が示す「熱中する、心血を注ぐ」という意味が含まれた「入」である。

以上の理解を踏まえたうえで、梵蔵の章題は「不二の法門に入る」と読んでおく。ただし、三漢訳のうち支謙訳「不二入法門」では「不二法門」とは読めない。「不二」は動詞の「入」に係り「不二にして入る法門」となろう。

1-2 「不二」の意味と定義

『維摩経』において「不二の語意を究めるには入不二法門品を読むのが近道」と考えられそうだが、そこには不二の定義はなく、その語意を求めることは難しい。しかし既述のように、経中の到るところで「不二」という名は出さずとも「不二」が説かれている[6]。その一例を挙げてみよう。

Ⅱ-11「この身体は、空虚で、我・我所を離れている。」[7]
（Ⅱ-11は第２章11節の意、以下同じ）

Ⅲ-4 「あなたの心が内にも住さず、外にも向かわないように、そのように宴坐すべきです。」

Ⅲ-6 「（法は）加えること（肯定）と、除くこと（否定）を離れている。捨てることもなく、取ることもない。生と滅を離れている。」

Ⅲ-13「煩悩がなく、また煩悩を離れることもないように … 禅定に入

ることなく、禅定から出ることもなく … 輪廻にあることなく、涅槃にあることもなく…」

Ⅲ-26「五蘊について、空性に随順すれば、不生不滅のものであり … 我と無我における不二性、これが無我の意味です。」

Ⅲ-34「罪は内にもなく、外にあるのでもなく、その内と外との以外に見られるのでもありません。」

Ⅲ-51「真如は二つであるとか、種々なるものであるとか、［そのように］言い表されるものではないのです。」

Ⅲ-52「菩提とは、意と法（対象）とを離れた不二なるものです。」

以上はほんの一例であり、不二思想は経典全篇にわたって説かれている。大鹿實秋は「入不二法門品」を除いた他の品で「不二」がいかに用いられているかを探り、『維摩経』における「不二」を以下のように定義している[8]。

(1) 相対する二者の無差別平等。
(2) 四句分別の俱非、相対する二の何れでもないこと。
(3) 相対する二類ではなくて、一類のなかで第二あるいは第三の同類の存在を認めない唯一絶対。

さらに大鹿は、「相対する二を否定した俱非では世俗を超えることはない。相対する二を超えて一の中となり切ったときが絶対」であり、「定義の (3) は真如の唯一絶対を不二と言ったものである」と説いている。上掲の例文からも、空性、真如、菩提が不二の同義語であることがうかがえる。

張［2011］は大鹿のこの定義を取り上げ、(1) (2) (3) のそれぞれに詳しい説明を加えていて興味深い。要約して紹介する[9]。

(1)「相対する二者の無差別平等」とはすなわち、**中道実相の立場**に基づいて二辺を平等に扱うことで、二辺は俱に平等な虚幻不実の性質をもっているので無差別である。
(2)「相対する二の何れでもない」とは、否定性が目立つ、すなわち二辺に対する否定であり、世間・出世間一切諸法に対する否定であり、仏教の

根本宗旨「**無我**」を表している。これは龍樹の『中論』における「八不中道」の否定思想と一致するものである。『中論』における「八不」思想は「不二」にほかならず、四種対応の「二」に対する否定を借りて、一切諸法の自性に対する否定を総括したものである。

(3)「絶対唯一」というのは、「相対を超越すること」であり、すなわち中道実相が**現象を超越する絶対性、唯一性**である。

『維摩経』においては、「有無（両極端）を離れる中道」という「不二」の原初的形態から、縁起説、空思想、そして真如・実相という見方へと変遷する種々なる「不二」が認められる。

1-3 「入不二法門」がもたらすもの

それでは「不二の法門」を入って進んだ先には何があるのだろうか。「不二法門」によって何がもたらされるのだろうか。その答えになると思われる一節が「問疾品 第五」（第４章 病気見舞い；Ⅳ-12）にある。以下に要約して示す。

顛倒は大病であり、私（菩薩）は病気を離れるべきである。
病気を追いやるとはいかなることか？ → それは我と我所を離れることである。
どのように我と我所を離れるのか？ → それは二を離れること。
どのように二を離れるのか？ → 内と外を意図しないこと。
内と外を意図しないとは何か？ → 平等性によって動くことも揺れることもないこと。平等性とはいかなるものか？ → 我の平等性と涅槃の平等性である。
それはなぜか？ → 両者（我と涅槃）とも空だからである。
なぜ両者が空か？ → これら両者は名称だけであって、実在するものではないから。
それゆえ、平等に見る者には、病いこそが空性なのである[10]。

以上の論述から分かるように、「二（我・我所や内・外など）を離れること」（不二）は平等性と空性に通じ、平等に見る者には病いは実在しない。すなわち、衆生は「不二」によって、顛倒という大病から解放される。「不二」は衆生救済の薬といってよい。

2 「入不二法門品」について

2-1 本品の構成

智顗の『維摩経文疏』では「入不二法門品」を三部構成とみている[11]。

第一段：維摩が訪問客である菩薩たちに「入不二法門」の経験を話すよう求める。

第二段：三十一人の菩薩たちと文殊が「入不二法門」について見解を述べ、その後、維摩が沈黙をもって「入不二法門」を表し、文殊が維摩の沈黙を賛嘆する。

第三段：諸菩薩の説示を聞いて、集会の大衆のうち五千人の菩薩が不二の法門に入った。

そのうち第二段を以下のような三段階から成るとみるのが通説となっている。

(1) 諸菩薩がそれぞれの見解を述べ、入不二法門とはいかなることかを言葉で説明する。

(2) 文殊が一切法は言説分別で入不二法門は不可説であると言葉で説明する。

(3) 維摩は黙然として、不可説の入不二法門を無言によって表す。

(1) は言葉で相を排除するので「以言遣相」（言を以って相を遣る）、(2) は言葉を排除することを言葉で説いているので「以言遣言」（言を以って言を遣る）、(3) は言葉を排除することを沈黙で示しているので「以黙遣言」（黙を以って言を遣る）と表現される。

2-2　維摩の問い：梵蔵漢対照

「入不二法門品」の冒頭で掲げられる維摩の問いをサンスクリット文、チベット訳、三漢訳で対照させると以下のようになる。

梵文：pratibhātu satpuruṣāḥ katamo bodhisatvānām advayadharmamukhapraveśaḥ / [12]
（貴い方々よ、菩薩たちにとって不二の法門に入るとはいかなることか、明らかにしてください。）

蔵文：skyes bu dam pa dag byang chub sems dpa' rnams kyi gnyis su med pa'i chos kyi sgor 'jug pa gang yin｜spobs par gyis shig｜[13]
（高貴な方々よ、菩薩が不二の法門に入るということがありますが、それはどういうことなのか、説明してください。）[14]

支謙：諸正士所楽菩薩不二入法門者。為何謂也。（諸の正士よ、楽う所の菩薩の不二にして法門に入るとは、何を為して謂うや。）

羅什：諸仁者。云何菩薩入不二法門。各随所楽説之。（諸の仁者よ、云何が菩薩の不二法門に入るや。各、楽う所に随って之を説け。）

玄奘：云何菩薩善能悟入不二法門。仁者皆応任己弁才各随楽説。（云何が菩薩の善く能く不二法門に悟入するや。仁者は皆応に己に弁才に任えたれば、各、楽うに随って説け。）

サンスクリットの疑問詞 katamaḥ は Which of many? の意味で、ここではその男性・単数・主格であることから、質問の意味は「数ある解説のなかからこれはという説明を一つ披露してください」という意味になろう[15]。サンスクリット文とチベット訳の文意は異ならないが、三漢訳は重点の置き方に違いがみられる[16]。

支謙訳：「不二にして法門に入るとは何を謂うのか」で、「不二の法門とは何か」を強調しており、重点は「不二の法門」とはどのような内容かにある。

羅什訳：「何をもって、菩薩が不二の法門に入るというか」で、菩薩は「い

かにして不二の法門に入るか」を強調しており、重点は「いかに悟入」するかにある。

玄奘訳：「何をもって、菩薩が善く不二の法門に悟入できるというか」で、菩薩はなぜ「善く不二の法門に悟入できるか」を強調しており、重点は「不二の法門になぜうまく悟入できるか」という理由にある。

2-3　維摩の発問の理由

1-2および1-3からも分かるように、「不二」については既に維摩自身がそのすぐれた弁才をもって十分に説き尽くしている。にもかかわらず、ここで改めて「入不二法門」について維摩が問いを発し、聴衆である菩薩たちに語らせることにはどういう意味があるのだろうか。この点について、『注維摩詰経』において羅什が次のように注釈している。

> 什曰く。有無たがいに用ゆるは仏法の常なり。前の品は有を説く。故に次に空門を説く。また次に始会より以来、ただ二人相対し、余はみな黙然す。今、おのおのその徳を顕わさんと欲するが故に、問いて尽く説かしむ。亦、云く。情惑同じからざれば、発悟に因あり。各の悟を説きて、広く衆の迷いを釈さしむ[17]。

聴衆である菩薩たちに問いが発せられた理由（目的）が二つ挙げられている。第一に、これまで聞く一方だった菩薩たちにそれぞれの徳（入不二法門の体験）を語る機会を与えることであり、第二に、菩薩たちの種々なる回答が、「情惑同じからざる」聴衆たちにとって悟りに向かうチャンスとなることである。維摩は衆生を導くための方便として病気を装い、今また並み居る聴衆の教化の手段として問いを発している。

羅什は上記の注釈に続いて、「今、法座まさに散ぜんとす。その深到を究めんと欲して、広く不二を説く。乃ち、其の妙を尽くすなり」[18]と述べているが、「入不二法門品」は法座のサミットであり、維摩の発問はそこに辿り着く重要な仕掛けとなっている。

2-4　三十一人の菩薩の回答 ― 以言遣相

維摩の問いに対し、法自在菩薩をはじめとする三十一人の菩薩たちは皆一様に、(1) 相互矛盾（対立）する「二」を提示し、(2) 提示した「二」を離れる了知を示し、そして、(3) 一切の定見を棄てた「不二」を示す、というパターンで回答していく。

王［2006］は「不二法門への入り方」を単遣法、双遣法、不取不捨法の三種に分類している[19]。その三種を要約すると以下の如くである。

(1) 単遣法：A の相空・性空を観て A を否定する。それによって non-A も否定される。
(2) 双遣法：A と non-A は性空・相空と観る。故に、A も non-A も無となる。
(3) 不取不捨法：A と non-A は相即、平等無二、不取不捨であるから、二は消える。

三十一人の菩薩の回答は異なった視点から種々に分類されるが、ここでは王の三分類法を採用し、また大鹿の「不二」の三層による定義も念頭に置いて分類してみた。梵蔵漢を対照した一覧表を作成したが、本稿では紙数の関係で、梵文和訳によって簡略に示す。菩薩の名前にも意味があると思われるので、音訳ではなく意訳で示した。

(1) 単遣法（相対する二者の無差別平等）：A が消えれば、non-A も消える　　(11菩薩)

発言順／菩薩名	「二」の内容	「二」を離れる了知
1法を自由に変現する者	生、滅	生じることがない→ 起こることもない
2吉祥なる秘密	私、私のもの	我を張ることない→ 私のものもない
3吉祥なる峰	雑染、清浄	雑染の実性(非実在)→ 清浄もない
4善き星座	心の揺れ、思考	心の揺れがない→ 思考もない
6瞬きしない	取ること、取らないこと	取らない＝認識しない→ 取ることもない
9獅子／王者	過失、過失がないこと	金剛のような智により束縛がない→ 解放もない
13訓練された意をもつ	輪廻、涅槃	輪廻の自性(非実在)→ 涅槃もない
15普く秘守する	我、無我	我を獲得しない→ 無我の獲得もない
19すぐれた意をもつ	眼、色(六根、六処)	眼(六根)をよく知る→ 色(六処)に執着しない
23遮られることのない眼	有身、有身の滅	(有身の滅とは涅槃。輪廻と涅槃に同じ)
26蓮華で荘厳された	自我の生起より生じた主・客	自我を完全に知る→ 主客の別なし

(2) 双遣法（相対する二の何れでもない）：空・無相に照らしてAもnon-Aもない（11菩薩）

発言順／菩薩名	「二」の内容	「二」を離れる了知
5美しい腕をもつ	菩薩の心、声聞の心	心は幻に等しい→ 菩薩の心も声聞の心もない
8花すなわち最高のもの	善、不善	不関与により→ 善・不善無相
10獅子のような意をもつ	有漏、無漏	法の平等性により→ 有漏・無漏無想
11安楽であると信解する者	安楽である、安楽でない	虚空に等しい感覚をもつ→ 一切に執着しない
14目の当たりに見る	尽きること、尽きないこと	尽にはもはや不尽なく、不尽は刹那的
24よく訓練された	身・語・意の律儀	これら諸法には作為がない相をもつ
25福田	福・非福・不動という行為	三つの行為は自性からして空
27吉祥を蔵している	知覚による顕示	知覚によって捉えるところがない(不取不捨)
28最上の月／満月	闇、明かり	一切諸法には闇なく明かりなし
30頂に摩尼をもつ王	正道、邪道	行じることのない者に正道邪道の想なし
31真実を喜ぶ者	真実、虚妄	慧眼をもって見れば、見ることなし

(3) 唯一絶対：真如、実相に照らして A と non-A を超越（A 即 non-A）　(9菩薩)

発言順／菩薩名	「二」の内容	「二」を離れる了知
7善き眼をもつ／すぐれた指導者	一相、無相	定義することなく、分別することなし
12ナーラーヤナ[20]	世間、出世間	世間は本性から空なれば、出ることなし
16電光の神	明、無明	無明の本性がなく、無明はそのまま明
17[人が]見て喜ぶ	色、空	色の自性は空
18光り輝く旗印	四界、虚空界	虚空を自性とするものが四界
20意の尽きることが無い	布施、一切智への廻向	布施は一切智を、一切智は布施を自性とする
21甚深なる覚知	空、無相、無願	空なれば、相なく、願なし
22寂静なる感覚器官	仏、法、僧伽	三宝はすべて無為にして、無為は虚空
29宝印を手にする	涅槃を喜び、輪廻を喜ばない	完全に束縛がない人は解脱(涅槃)を求めない

これら三十一人の菩薩たちはその名からしても錚々たる面々であり、維摩を見舞う文殊に付き従ってきた八千人の菩薩たちの中でも選りすぐりの菩薩たちであったと思われる。聴聞した残りの菩薩たちが感動して不二の法門に入って、この品が終わったとしてもおかしくない。そう考えると、三十一人の菩薩たちの回答を総括した文殊のコメントで終わっている支謙訳は、『維摩経』の古い形を留めているのかもしれない[21]。

2-5　文殊の見解 ― 以言遣言

各自の説を説き終わった菩薩たちが文殊に尋ねた。「菩薩にとって不二に入るとはどのようなことなのでしょうか」と。文殊の答えは各本で違いがみ

られる。

梵文：subhāṣitaṃ yuṣmākaṃ satpuruṣāḥ sarveṣām / api tu yāvad yuṣmābhir nirdiṣṭaṃ sarvam etad dvayam / **ekanirdeśaṃ sthāpayitvā** yaḥ sarvadharmāṇām anudāhāro 'pravyāhāro 'nudīraṇākīrtanānabhilapanam aprajñapanam ayam advayapraveśaḥ / [22]

（貴い方々よ、あなた方はすべて、よく説きました。けれども、あなた方が説き示したものは、すべて二です。［私が説く］**一つの説示を除いて**。すなわち、一切諸法は不可受、不可説、無言説、不説、離言説、非仮立である［という一つの説示］。それが不二に入ることです。）

蔵文：skyes bu dam pa khyed kun gyis kyang legs par smras mod kyi khyed kyis bshad pa de thams cad ni gnyis so || **bstan pa gcig ni ma gtogs te brjod du med pa** | smrar med pa | bshad du med pa | bsgrag tu med pa | bstan du med par gdags su med pa de ni gnyis su med par 'jug pa'o || [23]

（高貴な人よ、あなたがたの説はすべてよろしいが、しかし、あなたがたの説いたところは、それもまたすべて二なのである。**なんらのことばも説かず**、無語、無言、無説、無表示であり、説かないということも言わない、これが不二にはいることです。）[24]

支謙：如彼所言皆各建行。於一切法如無所取。無度無得無思無知無見無聞。是謂不二入。（彼の所言の如く皆各行を建つ。一切法に於て、所取無く、度無く、得無く、思無く、知無く、見無く、聞無きが如し。是を不二入と謂う。）

羅什：**如我意者**。於一切法無言無説。無示無識離諸問答是爲入不二法門。（**我が意の如くば**、一切法に於て、言無く説無く、示無く、識無く、諸問答を離る。是を入不二法門と爲す。）

玄奘：汝等所言雖皆是善。**如我意者**。汝等此説猶名為二。若諸菩薩於一切法。無言無説無表無示。離諸戯論絶於分別。是為悟入不二法門。（汝等の所言は皆是善なりと雖も、**我が意の如くば**、汝等の此の説は猶、名づけて二と為す。若し諸の菩薩、一切法に於て、言無く、説無く、表無く、示無く、諸戯論を離れ、分別に於て絶せば、是を不二法門に悟入すと為す。）

諸訳の違いは諸菩薩の発言を諾う言葉（下線部分）の有無である。羅什訳はこの一文を欠き、すぐに文殊の主張が始まる。文殊の主張する内容は、訳本によって表現に違いはあるものの、意味するところは異ならない。

注意したいのは梵文の「一つの説示を除いて」（太字部分）である。蔵本には bstan pa gcig ni ma gtogs te brjod du med pa とあり、bstan pa gcig は「一つの教え」、ma gtogs pa = sthāpayitvā（having put aside, with the exception of）は「～は除外して」であるから、合わせて「一つの教えを除いて」となろう。ただ、「一つの教え」をどう捉えるかについては説が分かれるかもしれない。

このチベット文の大鹿訳は「弁説の一事を離れて」で、長尾訳の「なんらのことばも説かず」と同意であり、Lamotte の仏訳 ‘Exclure toute parole’（Excluding all words）[25]、および Thurman の英訳 ‘To know no one teaching’[26]に通じる。河口は「一の教えを除いて」と訳し、蔵文および梵文と同意である。漢訳については、支謙訳は欠、羅什訳および玄奘訳では、「如我意者（我が意の如くば）」を「［皆さんと違って］私の（説示）では」との意に取れば、梵文に通じる。

2-6　維摩の沈黙 ― 以黙遣言

最後に文殊が維摩に問う。「あなたも不二の法［門］に入る教えをどうぞお語りください」（pratibhātu tavāpy advayadharmamukhapraveśaḥ /）[27]と。そのとき、維摩は黙ったままだった（atha vimalakīrtir licchavis tūṣṇīm abhūt /）[28]。文殊はこの維摩の沈黙を ‘sādhu sādhu’（善哉、善哉）と絶賛し、「これこそ、菩薩たちが不二の法門に入ることであり、そこには文字も言葉も音声も認識もはたらくことがない」（ayaṃ bodhisatvānām advayadharmamukhapraveśo yatra nākṣararutaravitavijñaptipracāraḥ/）[29]と維摩に感服脱帽する。

ここにおける維摩の沈黙は「仏陀の沈黙」（無記）に通じるものであり、「仏陀の沈黙」については、長尾［1955］をはじめすぐれた研究が少なくない。四津谷［1999］は「仏陀の沈黙」に言及した Hermann Beckh の

“*Buddha: Sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde*”[30]や Troy Wilson Organ の“*The Silence of the Buddha*” などの論文[31]を中心に「仏陀の沈黙」を整理分類して紹介している。そのうち Organ［1954］をみると、仏陀が沈黙を守った理由が六つ挙げられているが、その五番目が「自らの見解を説くことができないことに帰因する沈黙」（*He could not tell his own views.*）[32]である。その理由として、禅門でよくいわれる「言語は月を指差す指にすぎない」（*They are fingers which point to the moon.*）、すなわち「言語そのものの不完全性」を指摘し、「維摩の一黙」にも触れている[33]。長尾も「文殊がことばの無能力なること、その論理的操作の無能力なることを、ことばを以て表現したに対し、維摩はより端的に身を以てその不信用なることを表明している」[34]と述べている。

しかし、既に言葉によって各所で不二を説き、仏弟子を散々な目に遭わせてきた維摩が、ここで言葉の不完全性を表明するというのも腑に落ちない[35]。問題はむしろ言葉のもつ「現実制約作用」にあるのではないだろうか。言葉で表明することによって現実が狭められ、不二の法門によって到達できるはずの真如（tathatā）から乖離するからである。

2-7　五千の菩薩みな不二の法門に入る ― 無生法忍の獲得

「入不二法門品」を三段に分けた智顗の説によると（1-2参照）、最後の一文、すなわち「ここに教えが説かれたとき、五千の菩薩たちは不二の法門に入り、無生法忍を獲得した」（iha nirdeśe nirdiśyamāne pañcānāṃ bodhisatvasahasrāṇām advayadharmamukhapraveśād anutpattika-dharmakṣāntipratilambo ’bhūt //）[36]が第三段に当たる。蔵訳、羅什訳、玄奘訳とも意味に相違はない。支謙訳は前述のとおり維摩の沈黙と文殊の賛辞およびこの部分を欠くが、五千人の菩薩たちが「無生法忍」（anutpattikadharmakṣānti）を獲得したこの場面こそが「不二法門品」の頂点といえよう。維摩の発問、諸菩薩の回答、文殊の総括と維摩の沈黙のすべてがこの頂点に向かう布石であった。

3.「維摩の沈黙」を最高とする見方「三階論」について

『維摩経』の「入不二法門品」における「入不二法門」についての解釈説明を三つの段階に分ける考え方がある。三十一人の菩薩の「以言遣相」を第一段階、文殊の「以言遣言」を第二段階、文殊の「以黙遣言」を第三段階とし、低から高へ、浅から深へと垂直的に深化しているとみるいわゆる三階論[37]である。『注維摩詰経』における「維摩詰黙然無言」に対する注釈に端的にその見方がうかがえる。

> 什曰く。…… それ黙と語と殊なると雖も宗を明かすこと一なり。会するところ一なりと雖も而も迹に精麁あり。無言を言うこと有るは、未だ無言を言うこと無きに若かず。故に黙然の論は論の妙なり[38]。

> 肇曰く。…… 無言を言うこと有るは、未だ無言を言うこと無きに若かず。所以に黙然なり。上の諸々の菩薩、言を法相に措く。文殊は無言を言うこと有り。浄名は無言を言うこと無し。此の三、宗を明かすこと同じと雖も而も迹に深浅有り。所以に言は無言に後れ、知は無知に後る。信なる哉[39]。

> 生曰く。文殊は説く可き無きことを明かすと雖も、而も未だ説の無説を明かさざるなり。是を以て維摩黙然とし、無言以て言の不実を表す。言若し果して実ならば、豈黙す可けんや[40]。

支謙訳からは起こるべくもない「三階論」であるが、羅什門では鮮明となっていたようだ。しかし、この三段階を漸進してはじめて真実を了解し、不二法門に入ることができることはここまで論じてきたとおりである。もし諸菩薩の言説分別が無いまま、文殊が言を排斥したら、聞く人々にはっきりした理解をもたらすことはできないであろうし、もし文殊の説明がなかったら、維摩の沈黙は「答えられない、聞こえない、悟っていない」のとなんら違わないことになり、黙然の真義は理解されないことになる。三者が相互に呼応してはじめて「入不二法門」の筋道が明らかになるのであり、三者を下から上へ垂直的にみて「維摩の沈黙」を最高とする見方は、『百喩経』の

「三重楼喩」[41]に登場する愚人を想起させ、適切とはいえない。

おわりに

『維摩経』の冒頭、維摩が菩薩たちに発問する一文「各随所楽説之」に対して、僧肇は以下のように注釈している。

> 肇曰く。経の始めより已方、明かす所殊なると雖も、しかも皆、大乗無相の道なり。無相の道は、即ち不可思議解脱の法門なり。即ち第一義無二法門なり。これ浄妙の現疾の建つる所、文殊問疾の立つる所なり[42]。

僧肇が説くように、『維摩経』の全篇を通して明かされているのは第一義（paramārtha）なる無二法門／不二法門であり、それはすなわち不可思議解脱の法門である。「不可思議解脱」（acintyavimokṣa）は『維摩経』の副題／別名ともなっている非常に重要な概念である。ここで詳しく論じる余地はないが、『維摩経』の第12章「供養の物語と法の委嘱」に三度出る副題[43]に照らして（詳細は別稿で論じる）、「不可思議解脱」の精髄は、その解脱によって「方便の智の力」に入り[44]、それによって方便（upāya）が自在にはたらき出す「神変／神通」にあると理解できる[45]。言い換えると、「入不二法門」は「自在なる方便／善巧方便」がはたらき出すことにほかならない。大鹿の表現を借りれば「不可思議解脱は不二の実践」である[46]。

経典の主人公維摩が登場する第２章の題は Acintyopāyakauśalyaparivarta（不可思議にして巧みなる方便の章）であり、「不可思議にして巧みなる方便（不可思議善巧方便）」は維摩の異名といってよい。維摩は、「巧みな方便（善巧方便）に通達し」（Ⅱ-1）、「無量の善巧方便の智をそなえた者で」（Ⅱ-6）、「善巧方便をもって衆生を成熟させるために」（Ⅱ-1）、ヴァイシャーリーの大城に住んでいた。そして、「善巧方便によって、自分が病んでいることを示し」（Ⅱ-7）、見舞いに訪れた大勢の人々に対して、多病の器である身体を求めるのではなく、「無量の善業から生じる如来の身（法身）を求めよ」（Ⅱ-12）と法を示す。

冒頭で述べたように、「不二」と「真の菩薩行／慈悲」は『維摩経』の両

輪である。本稿ではその一方である「不二」について論じたが、それが実践としてはたらき出した「真の菩薩行／慈悲」との関係については稿を改めて論じたい。

《テキスト》

『梵蔵漢対照 維摩経』（大正大学綜合佛教研究所梵語仏典研究会、2004年3月）〔対照本〕
『梵文維摩経：ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂』（同上、2006年3月）〔校訂本〕
『対訳 注維摩詰経』（大正大学綜合佛教研究所 注維摩詰研究会、山喜房佛書林、2000年）

《参考文献》

ヘルマン・オルデンベルク著／木村泰賢／景山哲雄訳［2011］『仏陀：その生涯、教理、教団』（書肆心水）大鹿實秋［1988］『維摩経の研究』（平楽寺書店）
王建三［2006］「論《維摩詰経》之不二法門」（『宗教学研究』2006年第1期）、pp.152-156
河口慧海［1928］『漢蔵対照 国訳維摩経』（世界文庫刊行会）
許宗興［2003］「《維摩詰経・入不二法門品》「三階論」詮釈架構的商権」（『華梵人文学報』第一期、華梵大学文学院）、pp.271-294
許宗興［2007］「《維摩詰経・入不二法門品》論析 ― 以水平詮釈架構為論述依拠」（『成大宗教與文化学報』第八期、国立成功大学中国文学系宗教與文化教室）、pp.43-66
児山敬一［1958］「無にして一の限定 ―維摩経・入不二法門品について―」（『印度学仏教学研究』Vol.7-1）、pp.57-66
児山敬一［1965］「入不二の哲学的意味」（『東洋学研究』Vol.1、東洋大学東洋学研究所）、pp.1-10
児山敬一［1964］「維摩経における入不二と菩薩行」（『印度学仏教学研究』Vol.12-1）、pp.85-90
坂本廣博［2009］「支謙訳『維摩経』試訳（一）」（『叡山學院研究紀要』第三十一号、叡山学院）、pp.15-60
坂本廣博［2010］「支謙訳『維摩経』試訳（二）」（『叡山學院研究紀要』第三十二号、叡山学院）、pp.15-60
菅沼晃［1999］『維摩経をよむ』（NHK ライブラリー、日本放送出版協会）
高橋尚夫／西野翠［2011］『梵文和訳 維摩経』（春秋社）
張利文［2011］「論“不二”思想在仏教経論中的演進 ― 以《維摩詰経》為中心」（『安徽大学学報』（哲学社会科学版）2011年第3期）、pp.29-36
程恭讓［2006］「《入不二法門品》梵本新訳及其相関問題的研究」（『哲学研究』2006年第2期）、pp.45-51
唐秀連［2009］「「浄名杜口」之理趣 ― 通析《維摩詰経》之「入不二法門」之義蘊」（『法

鼓仏学学報』第五期)、pp.59-99
長尾雅人［1955］「仏陀の沈黙とその中観的意義」(『哲学研究』Vol.37-8, 430号)、pp.1-21
長尾雅人［1983］『改訳 維摩経』(中央公論社、1995年第4版)
長尾雅人［1986］『「維摩経」を読む』(岩波書店)
西野翠［2007］「『維摩経』における救済 ―「維摩の沈黙」を巡って―」(『印度学仏教学研究』Vol.56-1)、pp.(115)-(118)
橋本芳契［1966］『維摩経の思想的研究』(法蔵館)
橋本芳契［1988］『維摩経による仏教』(東方出版)
屋敷弥一［1968］『漢三訳対照 国訳維摩経』(私家版)'
四津谷孝道［1999］「『仏陀の沈黙』が語るもの」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第57号)、pp.(23)-(61)
Dharmachari Ratnaguna 'The Doctrine of Non-duality in the Vimalakiirti NirdeSa' ("*The Western Buddhist Review ― A Journal for Buddhist Inquiry*" Vol.3 (http://www.westernbuddhistreview.com/vol3/nonduality.html：2012年11月28日最終アクセス)
Étienne Lamotte［1962］"*L'Enseignement de Vimalakīrti*", Louvain; rendered into English "*The Teaching of Vimalakīrti*" by Sara Boin-Webb, The Pali Text Society, London, 1976.
Robert A. F. Thurman［1976］"*The Holy Teaching of Vimalakīrti*", The Pennsylvania State University Press (Fourteenth printing 2001)
Troy Wilson Organ［1954］'The Silence of the Buddha' ("*Philosophy East and West*", IV-2, Honolulu)、pp.125-140

[1] 大鹿［1988］「不二 ―〈維摩経の中心思想〉」(p.232)。

[2] 河口［1928］、pp.15～18.

[3] Dharmachari Ratnaguna は「不二の法門」を 'A Restatement of the Buddha's Teaching of the Middle Way'(ブッダの中道の教えの再説)と捉えて論じ、不二の思想の「敷衍・拡大」の危険を指摘し、阿含経典の「筏の喩え」や「水蛇の喩え」にも言及しており興味深い。

[4] 三種の蔵文和訳は長尾「不二の法門にはいる」、大鹿「不二法門悟入」、河口「不二法門に入る」とある。なお、Thurman の蔵文英訳は the Dharma-Door of Nonduality、Lamotte の蔵文仏訳は Introduction à la Doctrine de la Non-dualité (Sara Boin-Webb による英訳 Introduction to the Doctrine of Non-duality)。

[5] 児山［1958］、p.61.

[6] 大鹿［1988］(p.358) は「維摩経には全篇にわたって不二思想が説かれていて、かえっ

てそこに説かれている不二思想を看過するほどである」といっている。

[7] 提示した和文は高橋／西野［2011］による。

[8] 大鹿［1988］収載の「維摩経における神秘思想」の pp.358-362参照。

[9] 張［2011］pp.30-31。なお、張は大鹿のこの三層から成る「不二」の解釈は、二つの異なった方向の理解、あるいは二種の発展趨勢ともいうべきものを含むと考える。すなわち、(1) 肯定的な「両端兼備」(Dual-include) の思惟方式、すなわち平等、無差別を確立するという観念、および、(2) 否定的な「二辺双遣」(Dual-exclude) の思惟方式、これは現象界の各種の対立する二辺を否定し、「無所得」中道実相の意義を顕彰する。

[10]「校訂本」pp.49-50、「対照本」pp.196-199、高橋／西野［2001］pp.97-98参照。

[11] 智顗『維摩経文疏』に「就此品為三。第一浄名問。第二諸菩薩各各説。第三聞品得益。就第二各説中、凡有三十二菩薩」(『卍続蔵』第28冊、324頁下) とある。許［2007］pp. 53-54および脚注44参照。

[12]「校訂本」p.84.

[13] 蔵文および三漢訳は「対照本」pp.324-325参照。

[14] 参照：Lamotte 仏訳 'Messieurs (*satpuṛṣa*), exposez-moi ce qu'est pour les Bodhisattva l'entrée dans la doctrine de la non-dualité (*advayadharmamukhapraveśa*).' (Lamotte［1962］、p.301)

[15] 唐［2009］p.79参照。

[16] 許［2007］p.53参照。

[17]『注維摩詰経 巻第八』(大正38・396b)、『対訳 注維摩詰経』p.535参照。

[18]『注維摩詰経 巻第八』(大正38・396b-c)、『対訳 注維摩詰経』p.535参照。

[19] 王［2006］pp.153-155参照。

[20] 原初の人 (Nara) の息子。ヒンドゥー教ではヴィシュヌ神と同一視された。仏教に取り入れられて、仏法の守護神とされた。

[21] 支謙訳にはない「維摩詰黙然として無言」が『維摩経』の原形 (original form) にあったかどうかについては諸説ある。拙稿「『維摩経』の梵蔵漢対照による一考察」(『仏教学』第54号、掲載予定) を参照。

[22]「校訂本」p.89.

[23]「対照本」p.348.

[24] 長尾［1983］p.133.

[25] 仏訳は Lamotte［1962］p.317, その英訳は Sara Boin-Webb［1976］p.202.

[26] Thurman［1976］p.77.

[27]「校訂本」p.89.

[28] 同上。

[29] 同上。

[30] 同書には木村泰賢／景山哲雄による和訳『仏陀：その生涯、教理、教団』(書肆心水、

2011）がある。

[31] 上記の二論文のほかにK.N. Jayatillekeの“*Early Buddhist Theory of Knowledge*”（1980）、T.R.V Murti“*Central Philosophy of Buddhism*”（1980）を考察対象としている。

[32] Organ［1954］pp.136-138.

[33] Organは実際には鈴木大拙の“*Outlines of Mahāyāna Buddhism*”, p.107から文殊の科白（“What I think may be stated thus: That which is in all beings wordless, speechless, shows no signs, is not possible of cognizance, and is above all questioning and answering.”）を引用している。

[34] 長尾［1955］p.165.

[35] 西野［2007］pp.(117)-(118) 参照。

[36]「校訂本」p.89.

[37] この問題については、許［2003, 2007］において詳細に論じられている。なお、吉蔵（549-623年）の『淨名玄論』巻第一には「大論不二。凡有三品。一衆人言於不二。未明不二無言。所謂下也。二文殊雖明不二無言。而猶言於無言。所謂中也。三淨名杜默鑒不二無言。而能無言於無言。所謂上也。良以道超四句。故至聖以之沖默。不二爲極。意在於斯。問三階之説。」（大正38・853b28-853c4）と、「三階説」の語がみられる。

[38]『注維摩詰経 巻第八』（大正38・399b）、『対訳 注維摩詰経』p.558参照。

[39]『注維摩詰経 巻第八』（大正38・399c）、『対訳 注維摩詰経』pp.558-559参照。

[40]『注維摩詰経 巻第八』（大正38・399c）、『対訳 注維摩詰経』p.559参照。

[41] 僧伽斯那撰・求那毘地訳『百喩経』（大正4・544b11-c1）参照。

[42]『注維摩詰経 巻第八』（大正38・396c）、『対訳 注維摩詰経』p.536-537参照。

[43] acintyavimokṣa<u>vikurvita</u>dharmanayapraveśa（不可思議という解脱によって変現された法の理趣に入る［門］）、acintyavimokṣanirdeśaṃ dharmaprayāyam（不可思議という解脱を説示する法門）、acintya-dharmavimokṣaparivartam（不可思議法解脱品）。

[44] 第5章「不可思議という解脱の示現」（不思議品第六）の末尾で、維摩が大迦葉に言っている。「これが、不可思議解脱に住する菩薩たちが、方便の智の力に入ることである」（ayam acintyavimokṣapratiṣṭhitānāṃ bodhisatvānām upāyajñānabalapraveśaḥ //）（「校訂本」p.63）と。

[45] このような大乗菩薩の神通は、「煩悩を尽くした者（阿羅漢）は四神足がよく修習されており、白鳥のように虚空を飛ぶ。賢者は魔とその軍勢を征服し、この輪廻の世界から出て、涅槃にいたる」（『ダンマパダ 全詩解説』片山一良、大蔵出版、2009年、pp.251-252）といった小乗の阿羅漢のものとは著しく異なる。

[46] 大鹿［1988］p.362.

（大正大学綜合佛教研究所研究員）